

床呂 郁哉

私は文化人類学を専門としておりまして、フィリピン南部の「モロ」(Moro)と総称されるムスリム原住民について研究しています。さて東南アジアのムスリムの中でもフィリピンのムスリム社会については従来比較的語られることが少なく、あるいはその存在自体についても日本の方々の多くはご存知ないのではないかと思いますので、まずその社会の概略からはじめて、おおむね次のような順序で説明していきたいと思います。

まず最初に、フィリピン南部のムスリム社会について歴史的、社会・文化的なコンテキストから概略的な説明を行ないます。今回は時間の制約もありますので、フィリピンの中でも特に私が現地調査のフィールドとしているスールー(Sulu)諸島のムスリム社会を中心にして報告させて頂きたいと思います。

そして次に、スールーのムスリム社会について概略的な説明をした後、そこにおけるイスラームの特質ないしは問題性について、従来民族誌などで報告されてきた事例や私自身のフィールドでの観察を交えながら整理してみたいと思います。

そして最後に、従来の民族誌などには必ずしも報告されてこなかったような問題、とくに1970年代以降のムスリムの分離独立運動などの政治問題と最近のスールーにおけるイスラームの新しい動きとの関係などについても、政治学的というよりはむしろ文化人類学的な観点から若干の考察を行ないたいと考えています。

ではまず最初にフィリピンのムスリム社会について全体的なイントロダクションをさせて頂きます。まずフィリピンといいますと一般的にはキリスト教、特にカトリックの国というイメージが非常に強いと思います。これは無論、人口統計的には誤りではないわけですが、フィリピンの全体がこうしたカトリッ

クのみから構成されているかと言えばそうではなく、カトリック以外にもイスラームやあるいは大宗教には属しないいわゆる精霊信仰（アニミズム）を信じる文化的少数民族がフィリピンには存在するわけです。

ムスリムについて言えば、もとより正確な数字は不明ですが推定では約400万人にのぼるムスリムが存在すると言われています。この400万人という数字はフィリピン全体の人口に対する比率で言うと約5%に過ぎないわけですが、隣国のイスラーム国家マレーシアのムスリム人口の約半分にあたる人口であり、決して無視していい数字ではないと思います。そして現在に至るま出フィリピン北部のルソン(Luzon)島やビサヤ(Bisaya)諸島のクリスチャンとは異なる独自の文化や伝統を保持しており、また彼ら自身「モロ」即ちムスリム・フィリピーノとしての独自のアイデンティティを誇っており、文化的にもまた政治的にも独自の意味と重要性を持っていると言えます。

さて、フィリピン南部におけるイスラームの浸透とムスリム社会の発展についての歴史的な経過を説明します。まず16世紀前半にフィリピンにはじめて西欧人マゼランが来航したとき、既に当時のミンダナオ(Mindanao)島とスールー諸島にはムスリムによるスルタネイト(sultanate)即ちイスラーム王国が成立していました。またビサヤ諸島のセブ(Cebu)島付近で原住民の抵抗にあつて戦死したマゼラン(Magellan)の後を継いでレガスピ(Legaspi)らがフィリピン植民地化を開始し、その一環としてマニラ(Manila)に遠征を行なった際にも、そこにはボルネオ(Borneo)島のブルネイ(Burunei)と関係の深いムスリム社会が成立していました。このようにスペイン勢力がこの地を植民地化する以前に、スールーやミンダナオさらにマニラを含む地域に既にイスラームが浸透し、王権と呼べる規模のムスリム社会が成立していたことが認められます。

地理的なことについてもう少し述べると、歴史的にもまた現在に於てもムスリム勢力が最も強い地域はやはりフィリピンの南部、特にミンダナオ島の南部と西部、そしてミンダナオ島南西部のサンボアンガ(Zamboanga)半島からボルネオ島北部の間にかけて点在するスールー諸島が中心であると言っていいでしょう。このミンダナオとスールーの二つの地域のムスリム社会は（ミンダナオ島

内陸部などの例外はありますが) いずれも歴史的には海上交易や海産物採集などを通じて海に非常に依存する社会、即ち広い意味での海洋民の社会であると言っていると思います。特に私がフィールドとするスールー諸島においては歴史的にはもちろん現在に於ても、その生活の糧のほとんどを海に依存すると同時に、海はそれ自体例えばバジャウ(Badjao)族ら海洋民にとっての生活の場でもあります。そこで次にフィリピン南部のムスリム社会の中でも特にスールー諸島の海洋民の社会について報告したいと思います。

スールーのムスリム社会について歴史的な話をもう少しだけしますと、スールーを含めたフィリピンへのイスラームの浸透は13世紀以降の東南アジアへのアラブ人を含めたムスリム商人の到来に遡るとされています。こうした海上交易活動の展開の中でスールーにもブルネイ経由でムスリム商人やイスラーム布教者が13世紀後半から到来するようになったと考えられています。こうしたイスラーム布教者はスールーの現地側の伝承ではマクダム(Makdum)と呼ばれ、一説ではスーフィーの伝道者であるとも言われています。ともあれこうしたムスリム商人やイスラーム布教者の活動にともなって、現地の伝承では15世紀半ば頃までにはスールーにイスラーム王国、スールー・スルタネイトが成立したとされています。このスールー王国は歴史的には豊富な海産資源の輸出や中継などの海上交易で発展しますが、その最盛期、最も交易圏が拡大した18世紀前後には現在のインドネシアのスラウェシ(Sulawesi)島のマカッサル(Makassar)との交易やミンダナオ島やさらには中国とも盛んに交易活動を展開し、さらに18世紀後半からは西欧のいわゆるカントリートレーダーらをも巻き込んだ形で国際交易を活発に行なっていました。現在においてはフィリピンの中でも非常にマージナルな位置にあるというイメージが強いスールーですが、歴史的にみればこの様に非常に意味のある地域であるということが出来ます。

さて以上で歴史的な話はここでひとまず終わり、次にムスリム社会内部の構成について述べてゆくこととします。最も大きなカテゴリーから言うとフィリピンのムスリム達は一括して「モロ」と総称され、しばしば「モロ族」とか「モロ民族」と言ったふうには呼ばれたりもします。しかし実を言えば、文化人類

学が使うエスニックグループという意味での「モロ族」と呼ばれる集団が存在するわけではなく、「モロ」と言うのはあくまでもフィリピンのムスリムに対する極めて包括的なラベルであると言えます。そして具体的にはその「モロ」と一括されるムスリムの中にはそれぞれ言語や文化の違う多くの異なった民族集団が存在します。ミンダナオ島ではマギンダナオ(Maguindanao)族やマラナオ(Maranao)族、スールーではタウスグ(Tausug)族やサマ(Sama)族などが主要な民族集団として挙げることが出来ますが、ともあれ「モロ」即ちフィリピンのムスリム社会は数え方によっては10以上にのぼるこうした複数の民族集団からなるポリエスニック社会であると言えます。

さて話をスールーに戻しますとここでも大きく分けて3つの民族集団が認められます。まず最も人口的にも政治的にも有力な集団としてタウスグ族が挙げられます。これは歴史的には先ほど述べましたスールー・スルタネイトの王位や貴族の地位を独占してきた種族であり、また海上交易のオーガナイザーとして活躍した種族でもあります。次にこのタウスグ族の王権の下で海産物の採集などに動員されてきたサマル(Samal)族とバジャウ族という民族集団が挙げられます(この民族名称は他称、自称は「サマ」)。

このタウスグ族、サマル族、バジャウ族の社会についてそれぞれもう少し説明することにします。まずスルタネイトの座を独占したタウスグ族の社会は伝統的にはハイアラーキカルな社会であると言えます。即ち頂点にスルタン(Sultan)つまり王が君臨し、その下にダトゥ(Datu)ら貴族層が占め、その下には平民、そして最下層には奴隷達が位置するピラミッド状の階層社会が成立していました。生業としては小規模な農耕を除くとやはり海上交易が大きなウェイトを持ちます。そして文化的には非常に個人や親族の名誉や体面を重んじ、こうした名誉を守るためには死をも厭わずに戦うことが尊重されます。このため、ひとたびタウスグが恥を掻かされた、ないし名誉を傷つけられた場合には「恥をすすぐ」ために復讐が義務とされ、事実タウスグ社会の中では現在でもこうした復讐闘争が頻発しています。またこの復讐闘争においては「昨日の敵は今日の友」と言った具合に状況に応じて臨機応変に敵・味方を区別し、周囲の



人間をフレキシブルに動員てゆくことが求められます。こうしてタウスグ社会は階層社会であると言う一方で、ミクロなレベルでは常に状況に応じて集団を再編成してゆくようなフレキシビリティを兼ね備えた社会であると言うことが出来ます。

イスラームについては後で詳しく触れますが一言言っておくと、スールーにおけるイスラームは政治制度つまりスルタネイトの国家イデオロギーとしての側面を持っていました。このため現在に於ても、従来スルタネイトを独占したタウスグ族は他のサマル族やバジャウ族にたいして一種の優越感を持っており、自分達が最も熱心で優れたムスリムである事を主張する事がしばしばみられます。さてこのタウスグ族に対してサマル族やバジャウ族は歴史的には従属的な位置に甘んじてきました。スールー・スルタネイトの海上交易活動ではこのサマル族やバジャウ族はナマコやフカヒレ、真珠などの第一次産品の供給者という役割を担ってきましたが、交易自体のヘゲモニーはタウスグ族に握られていました。

社会構造的には、タウスグ社会が階層的だったのに較べるとサマル族やバジャウ族の社会は比較的平等主義的社会であると言えます。特に船上生活者であるバジャウ族の社会に於ては、パンリマ(Panglima)と呼ばれる首長は存在するものの、彼には説得によって紛争を解決するほか如何なる強制力もなく、またなんらの社会的特権もありません。この様にサマル族やバジャウ族の社会はタウスグに較べて極めて平等主義的な社会であると言うことが出来ます。

さて本題であるスールーのイスラームの問題について述べてゆきたいと思えます。まず従来の民族誌などでスールーのイスラーム信仰の特徴として挙げられてきた事は、この地域のイスラーム信仰は非常にシンクレティックな性格が強いというものです。つまり土着的な前イスラーム的な文化要素とイスラーム的文化要素が混交して、スールーのイスラーム信仰が形成されているというものです。注意しておくべきなのは確かに全般的にはこうした傾向は認められるとはいえ、こうした民族誌的調査の多くは70年代前半までのものであり、現時点での状況とは必ずしもそぐわない面があるという点であり、この点につい

ては後でもう一度触れることとします。

ともあれ、従来の民族誌的報告などを総合するとスーラー社会におけるイスラームは非常にシンクレティックなものであり、いわゆる「フォーク・イスラーム」的な性格が強いと言うことが出来ます。

例えば先ほど最も信心深いムスリムであると自認するタウスグ族においてさえ、その信仰内容を見てみると非常に精霊信仰的な性格が強いことが分かります。もちろん信仰上最高の存在が全能の神アッラーであることは変わりませんが、このアッラーは普段の生活に直接影響を及ぼすにはあまりにも偉大で遠くにあるとされ、むしろ直接日常生活に良くも悪くも影響を及ぼす存在として様々なスピリットの存在が信じられています。例えば人が病気になると必ずこうしたジン(jin)やシャイターン(saytan)と言ったスピリットが原因として想定されて、マングウバット(Mangubat)と呼ばれる呪術医に診断を頼みます。するとマングウバットは病因であるスピリットの名を挙げ、その種類に応じて効果のあるハーブを与えたり、呪文を唱えたりして呪術的な治療を行ないます。

こうした精霊信仰の他にタウスグ族のフォーク・イスラームとして興味深いものにイルムー(ilmu)が挙げられます。これは元来アラビア語で知識や学問を意味しますがスーラーにおいてはこのイルムーとは非常に秘義性の高い呪術的知識、いわゆるエゾテリックノリッジの事を意味します。そしてまたこのイルムーを持つ人間はそのことで非常に強い呪的パワーを身に付けることが出来ると信じられています。例えばイルムーを持つ者は決して銃弾に当たらないあるいは当たっても銃弾を通さない不死身の体を持つと考えられています。私もホロ(Jolo)島で、70年代のミンダナオ内戦のときにもこのイルムーのおかげで無傷ですんだと言うような話を数多く聞く事が出来ました。あるいはイルムーに類似の信仰としてアンティンアンティン(anting-anting)というようなお守り、これは小石や木片あるいはアラビア文字を書いた紙片ですが、こういったものに関する信仰があります。

以上のようにスーラー社会でイスラームの浸透が最も進んでいたと考えられてきたタウスグ族においてさえ、こうした精霊信仰ないしは呪術的要素が顕著

に認められます。サマル族や、イスラーム化が比較的最近の現象であると考えられる家船民のバジャウ族の場合はこうしたシンクレティックな性格はよりいっそう顕著に認めることが出来ます。たとえばバジャウ族ではマゴンボ(magombo)儀礼と呼ばれる祖先祭祀儀礼が年に一度盛大に行なわれますが、これにはムスリムに改宗していないバジャウ族の者はもちろんムスリムに改宗した者も何の違和感もなく、これは先祖代々行なわれてきた伝統であるということで参加します。

以上まとめますと大きな傾向としてスールーにおけるイスラームは非常にシンクレティックなものであるという事が指摘しうると言えます。

さて最近こうしたスールーの伝統的なイスラーム信仰のあり方には必ずしも収まらないような新しい動きを認めることが出来ます。これは第二次大戦後のイスラーム復興の流れや、更に1970年代のフィリピン・ムスリムの分離独立運動ともある程度連動したフィリピン・ムスリムのイスラーム意識の高揚を背景としたものであり、内容としては従来のシンクレティックな信仰に対して、よりオーソドックスな、もしそう言っていえば原理主義的なイスラーム信仰を追求していくような流れであると言えると思います。

この動きは例えばスールーではタウスグ族が最も多く住むホロ島のホロ(Jolo)などの市街地で顕著な傾向ですが、その背景としては既に1950年代に中東諸国からスールーへ50人のイマーム(Imam)が派遣されたり、中東特にエジプトなどが奨学金をフィリピン・ムスリムに与え始めたりした事に遡ります。こうして中東に留学したフィリピン・ムスリムの中から60年代後半にはヌル・ミスアリ(Nur Misuari)らモロ民族解放戦線の若手指導者達が現われてくる一方、アズハル大学などでイスラーム法やイスラームに関する厳格で豊かな学識を身に付けた人々が70年代以降続々と帰国しホロなどでイスラームの指導・啓蒙活動の中心指導者層として活躍しはじめています。こうした中東帰りの学識者はウスタツ(Ustaz)と呼ばれ現地でたいへん尊敬されています。例えばホロの有名なウスタツの一人にアル・ウスタツ・イブラヒム・ガザーリー(Al-Ustaz Ibrahim Ghazali)という人がいますが、1990年のラマダンに私が

ホロ市を訪問したときも、非常に精力的にイスラーム・セミナーを組織したりモスクやマドラサの増設運動に取り組んでいました。また、従来のタウスグ社会で一般的だった精霊信仰や、銃器による復讐闘争についても正統なイスラーム信仰とは相容れないとする啓蒙活動を行なっています。また従来はスールーのイスラームは王権との結び付きが強く、モスクのイマーム、ビラル(Biral)、ハティーブ(Hatib)といった役職者はスールーのスルタンによる任命というのが原則だったのに対して、現在ではいま述べたような動きの中で各コミュニティごとに選ぶという方法に変わっています。

こうして、従来支配的だった王権との結び付きを排除してゆくという、ある意味で原理主義的な傾向がホロにおいてさえ認めることが出来ませんが、これは先に述べたMNLF（モロ民族解放戦線）の主流派であるヌル・ミスアリ派のイデオロギーと非常に近いとも言えます。そのイデオロギーでは本来のイスラームと従来の伝統的スルタネイトといった社会形態は基本的に矛盾するとされますが、インタビューなどを通じて彼らの理想とする統治形態を聞いてみたところ、彼らの答えはスルタネイトの様なものではなくて、モスクを基盤とした直接民主制によるイスラーム共和国を目指すというものでした。

こうしたイデオロギーを背景に70年代にはミンダナオやスールーでMNLFとフィリピン政府側が衝突し、内戦の様相を呈しましたが、この際ムスリム側は必ずしも一枚岩にまとまらず、即時分離独立という要求はかなえられませんでした。このミンダナオ内戦の経過について詳しく述べる時間はないので省略しますが、結果的に言うと1977年のトリポリ協定で内戦は終結したものの内戦の原因となった問題の多くは根本的には未解決のまま、ムスリムの内部でも完全な独立＝インディペンデンスを目指すのかあるいは部分的自治＝オートノミーを目指すのかなどをめぐって幾つかに意見が分かれている状況です。また89年に行なわれた住民投票ではミンダナオ島とスールー諸島の内の4つの州のみが自治を決めています。

MNLF自体についても、先に述べた主流派の原理主義的イデオロギーに対する伝統的貴族層のスルタン・ダトゥラの反発によっていくつかの分派に分か

れているのが現状です。また複雑なことにこの分裂にはフィリピン・ムスリム内部でのタウスグ族、マギンダナオ族、マラナオ族など民族集団相互の確執とも関係があるとも言われています。

こうしてムスリムの側は階層的にもまた民族集団としても必ずしも同じ「モロ」という単一のムスリム社会ないしは統一した政治勢力にまとまっていないわけですが、そうした状況について最後に若干の考察を行ないたいと思います。

まず指摘したいのはミンダナオ内戦の中から明らかになってきたフィリピンにおけるムスリム社会のある意味での統一の欠如ないしは一種のモザイク性とも言えるべき性格はただ単に、ムスリム社会内の階級的、ないしイデオロギー的路線対立といった近代政治学的文脈のみでは完全には解明しきれない側面を持つということです。それはむしろフィリピン・ムスリム社会が伝統的に持つ文化的・社会構造的特質それ自体に根ざした問題であるのではないかということが考えられます。

具体的に述べていくとまず第一に先に述べた「モロ」の多民族的・多文化的構成それ自体が何よりもそうした内戦以降のムスリムの一見ばらばらな対応に影響していると言えます。最初に述べたように「モロ」と称されるフィリピン・ムスリムには言語はもとより生業や慣習法（アダット）、社会構造、政治的な力などを異にする複数の民族集団が存在してきました。大きな枠としては共に同じイスラームを信仰した基層文化の面でも多くの文化要素を共有しつつも、これら「モロ」の諸民族間では現在のところ誰もが意志疎通しうる共通のリンガフランカさえ存在しません。

またそうした言語的・文化的ギャップより重要なのは、モロの民族集団相互に歴史的に存在してきた敵対意識や優劣意識が挙げられます。歴史的にはタウスグ族の占めるスールー諸島とマギンダナオ族が占めるコタバト(Cotabato)は別個のスルタネイトを形成して海上交易をめぐる競争関係にありました。さらにはスールーに限ってみても先に述べたようにタウスグ族とサマル族、バジャウ族等との間には歴史的な支配・被支配関係に根ざした一種の優劣の意識ないしは差別感情が根強く存続しています。現在における「モロ」諸民族間の不

統一の理由のいくぶんかはこうした歴史的に規定された文化的・民族的多様性や異質性に由来すると言えるのではないのでしょうか。

以上どちらかと言えばフィリピン・ムスリム社会のいわば「ばらばら性」についてややネガティブなトーンで語ってきましたが、最後にここで、フィリピン・ムスリムの海洋民社会特有の「ばらばら性」それ自体が持つ一種の可能性なり有効性について指摘したいと思います。

結論から言うとフィリピン・ムスリム社会の「ばらばら性」＝分散的特質は一方では統一したムスリムによる国民国家的形態を追求してゆく上での障害になっている面も指摘できるわけですが、また他方ではこの地域の海洋民社会の風土に根ざしたそれなりの合理性や強靱さをも持っていると考えられます。

スールーに代表されるような海の社会においては、絶えずその時の状況に応じて臨機応変に敵味方を区別して再編成してゆくことが要求されますが、そのためには明確に区別されたバウンダリーを持った集団よりはむしろ、ある程度ばらばらで自律した単位がその都度再編され緩やかに連合する様な集団形成のあり方が適していると言えます。ここにおいてモロ社会の分散的特質は非常なメリットを発揮すると考えられます。

こうした集団形成のあり方はやはり明確なバウンダリー（例えば国境）やメンバーシップ（例えば国籍）で区切られた近代国民国家の組織のあり方とはかなり異質な発想であると言えます。一見中央集権的な組織に見えるMNLFもその実体は、6、7人ぐらいの規模の自律した小集団がその都度特定の「コマンダー」(Commander)と呼ばれるリーダーの下でパトロン・クライアント的な結び付きによって再編成され緩やかに連合したものであり、決して明確なバウンダリーやメンバーシップを持ったものではないと言われています。こうした事例に典型的に現われているような海洋民社会の分散性というものは少なくともスールーの地域においては伝統的に非常に意味のあるものであり、集団形成に於て有効であったと考えることが出来ます。

元々こうした分散的傾向の強いスールー諸島やミンダナオ島の海洋民社会は、しかしながら今世紀に入って時を経るにつれ好むと好まざるとに関わらず全く

異質な統合形態である国民国家という枠組みの中に編入されてしまいます。そこにおいては中央政府の行政機構によって土地はバウンダリーを引かれ、従来自由だった海洋民の移動は国境の枠の中に分断され、「モロ」は何よりもまず「フィリピン国民」としてのメンバーシップを強制され、「国民統合」の名の下で文化的な同化政策が遂行されることとなりました。こうした伝統的ムスリム社会と、それとは異質な国民国家の原理との矛盾が頂点に達したときにミンダナオ内戦は始まったと言えます。

こうしてみるとミンダナオ内戦は単に政治的な闘争であったばかりでなく二つの互いに異質な社会原理・二つの異質な文化の衝突であったと言うことも出来ます。そしてムスリムの側はやはり伝統的な分散と移動の戦術と集団形成によって対応したと言えるのではないのでしょうか。このようにある意味では近代国民国家の組織原理とは対極にあるフィリピン・ムスリムの海洋民社会について、またそこにおけるイスラームの意味についてはまだまだ言い足りない点が多いのですが、とりあえず以上で今回の報告を終らせて頂きます。